

1. 綾瀬川流域の概要

1.1 流域の変遷

江戸時代以前の綾瀬川は、荒川からの水の流れが大きく、元荒川より大河であったと言われ、当時の呼び名は川筋が定まらず、多くの瀬があり、その姿が綾（織物の一種）に似ていたといわれることや、流路がたびたび変わることから、「あやしの川」と呼ばれていた。

江戸時代には幾たびも洪水が発生し、その都度に川普請が行われてきた。

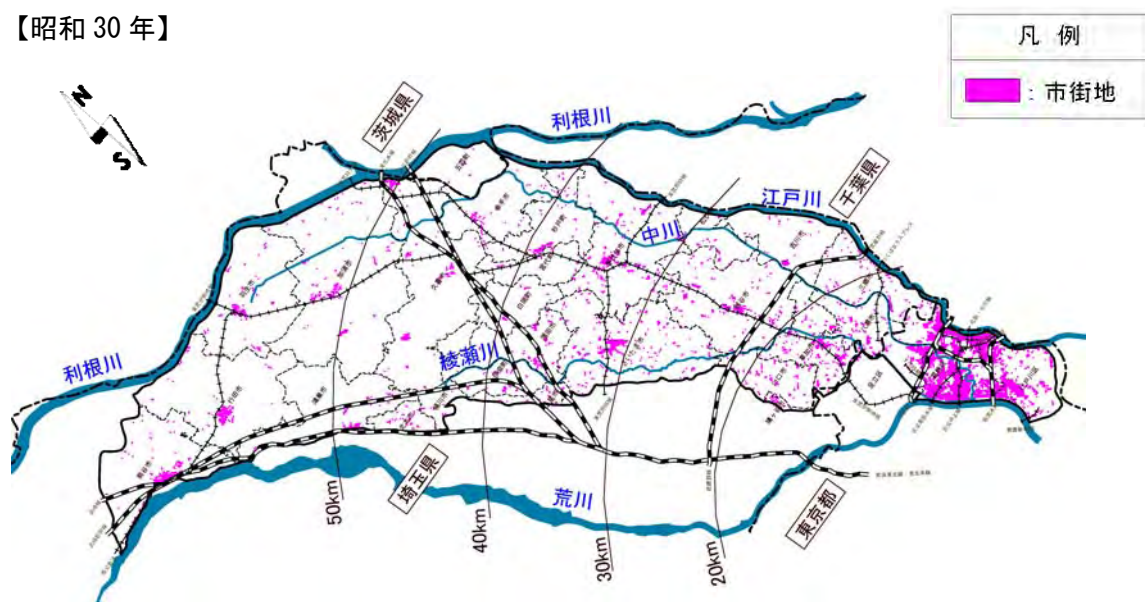
江戸幕府は、1610 年頃から現在の桶川市小針領家付近から下流の台地の治水と新田開発を目的として、伊奈備前守忠次が長さ約 900m の人工の堤（備前堤（行田蓮田線・鍋蔓橋地点、近くに新幹線））を築造した。この締切堤によって元荒川と綾瀬川が分離され、現在の綾瀬川の起点となっている。

その後、江戸時代の川普請（堰の廃止等）や宿場等の発展によって、綾瀬川にも舟運が行われるようになり、沿川の河岸も発達し、様々な物資の輸送が見られ、埼玉の物流を担うとともに、芸術や文化の交流にも寄与してきた。しかし、その舟運も陸上交通の発展とともに、昭和 30 年代には姿を消していった。

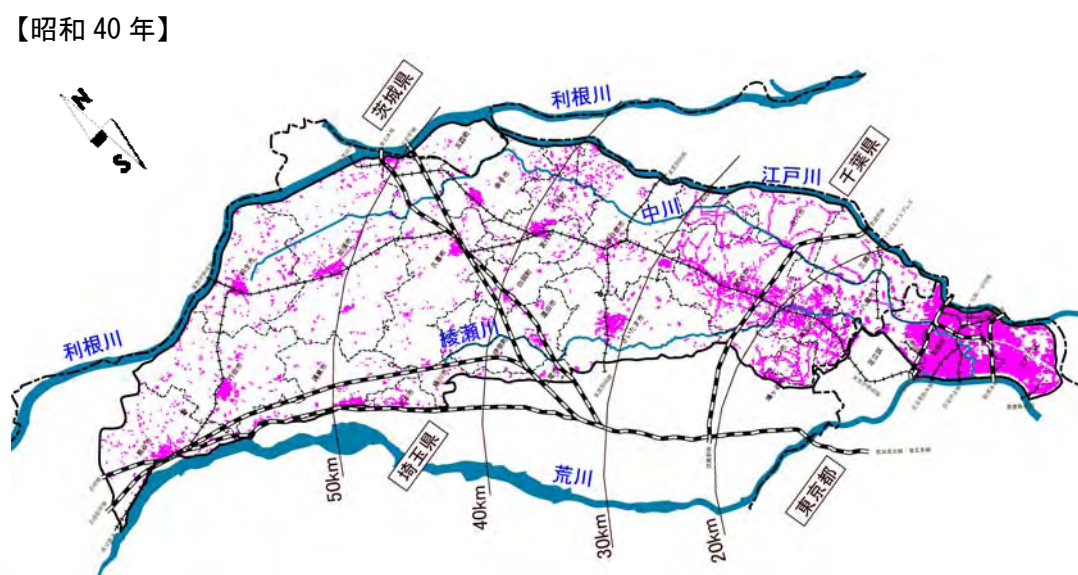
1920 年（大正 9 年）には、綾瀬川においても近代的な河川改修に着手し、堤防や河道の整備が進められてきた。しかし、低平地という特徴から洪水時の浸水被害が頻繁に発生してきたことから、流域を対象とした総合的な治水整備が現在進められている。

一方で、昭和 40 年～50 年代の流域の都市化の進展は、人口や産業の急速な集積によって、自治体の努力にも関わらず社会資本である下水道等の整備が追いつかず、工場排水や生活雑排水が直接河川に流入し、水質汚濁が社会問題として顕在化してきた時代であった。

【昭和 30 年】



【昭和 40 年】



【昭和 50 年】

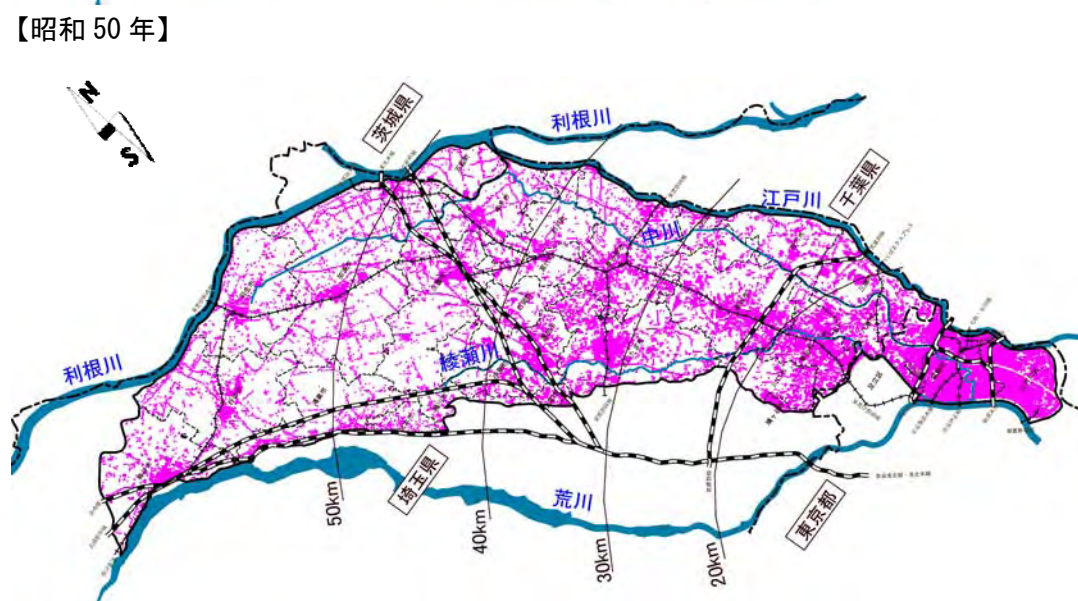


図 1.1 綾瀬川流域の都市化の進展

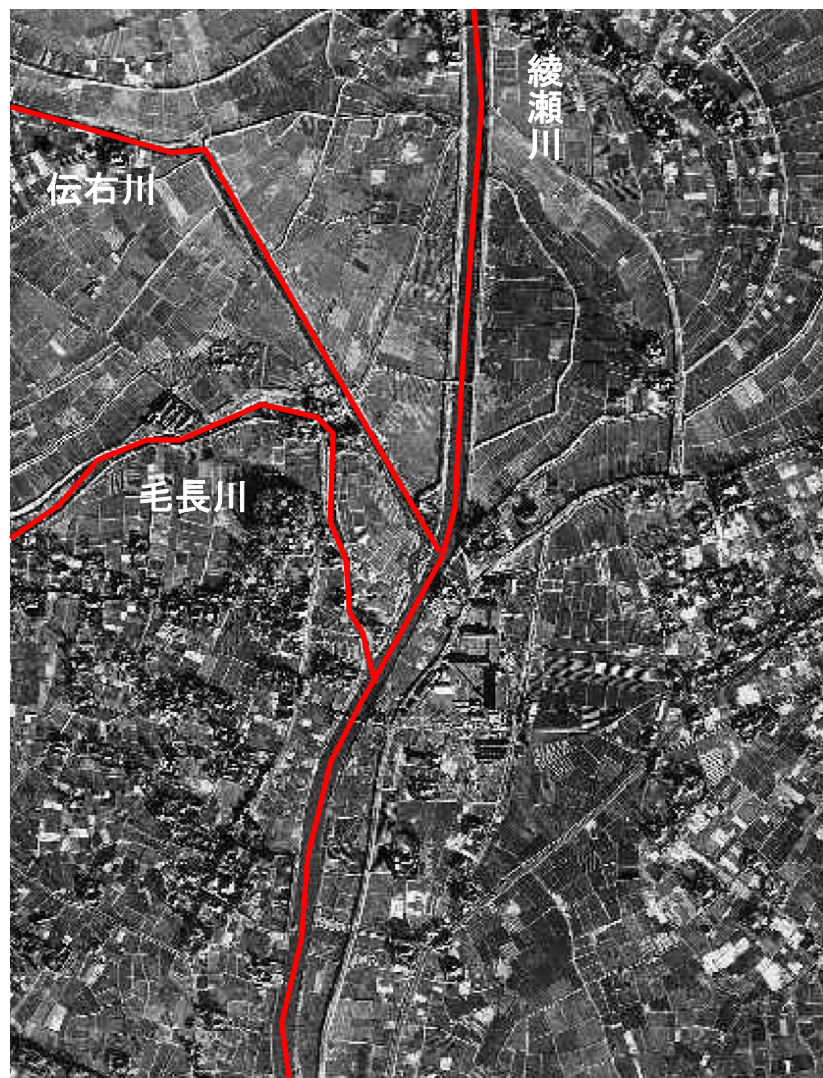


図 1.2 綾瀬川の歴史

※1:1610 年頃から、伊奈備前守忠次が、現在の桶川市小針領家付近から下流の台地の治水と新田開発を目的に築造したもの。備前堤により、元荒川と綾瀬川に分離され、綾瀬川の起点となり現在に至る。

※2:洪水のたびにおこった上流と下流の村々の間で備前堤をめぐる争いを調停するために、土俵を積む高さを制限する目安とされたもの

【1947 年 (昭和 22 年)】



【2009 年 (平成 21 年)】



図 1.3 航空写真による変遷 (三川合流付近)